窓

フォト劇場（44）

写真が生むものがたり

四季ごとに桜一木（ひとき）を写す窓父の生涯重なり見つむ

都甲真紗子

人生五十年と言った時代、大きな事業に奔走していた父が病に倒れ終戦の秋に逝った。年々窓に映る桜の木、満開から青葉繁る季、散り果てて裸木となる姿に、桜を愛した父が浮かび、志半ばの無念を偲ぶ窓である。

未来図の構図のやうな窓にさすひかりの奥に予言者は棲む

臼井良子

年を取って窓ごしに自然の美しさをひとり楽しむことが多い。ミサイルがとび戦禍が続くこの地球は、沸騰期に入り、日本の四季は薄らいで来た。不安を抱きながら生きる智慧を日々探している。

写真・木畑紀子

背のびして窓よりながめし家並みの向こうに小さく九十九里の海　浅田みどり

母の郷里は千葉県飯岡町で実家の二階からは家並みの先に九十九里の海が輝いて見えた。山育ちの私は浜辺を歩くのは怖かったが、その窓から見える海は大好きだった。その海が後に津波となって押し寄せて来ようとは。

四十人それぞれに寄り添う窓はクラスのみなをよく知っている　早川晃央

教室の窓は人気だ。ぼーっと外を見たり、窓際でしゃべったり。カーテンにくるまる生徒もいるし、息を吹きかけ落書きもある。席替えも窓際は当たりらしい。窓は担任以上に一人一人をよく知っているのかもしれない。